

本論文は

# 世界経済評論 2019年 1/2月号

(2019年1月発行)

掲載の記事です



## 世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料  
OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読  
期間中

### デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。  
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン販売

## 民主主義のために接吻を

佐藤 紘彰

9月の半ば美術批評家の Janet Koplos が毎年恒例の美術館巡りにニューヨークにやってきた。ジャネットは1980年代の終わりに知り合った人だ。当時はご夫君がIBMに勤めていたので東京に数年住んでいたが、ぼくがそのころ隔週コラムを Mainichi Daily News に書いていて、そう誘ってくれた Roger Pulvers 君が辞めることになった。そこで、ジャネットが一時取って代わることになった。その後IBMの夫と離婚して、ボーイフレンドとしばらくニューヨークに住んでいたが、別れてミネソタに戻った。

招いた夕食で、ふとジャネットに「Al Franken の辞職を地元ではどう見ているか」と尋ねてみた。昨年末本誌に書いたフランケン上院議員（民主党）はミネソタを代表していた。ところが間もなく同議員は#MeTooでセクハラ糾弾を受け、上院の倫理委員会の調査を喜んで受けたと言ったにもかかわらず、事態は急転直下、今年1月には辞職を余儀なくされた。理由は Kirsten Gillibrand 上院議員を筆頭とする民主党女性議員中心の辞職要求だった。

## Domestic Abuse

ぼくの問いに対して、ジャネットは「あんなのはセクハラの名に値しない」というのがミネソタ州民の言い分だと一蹴した。

フランケンに最初の#MeToo糾弾をあげた女性は、フランケンが乳房を触ったということだった。しかし、この仕草はその女性がフランケンと一緒に2006年アメリカ軍人慰問団(USO)に加わって中東を旅行している時にコメディ寸劇の一部としてしたものだ。そのため、これをセクハラと見なすのはおかしいという意見もあった。フランケンにはコメディアンとして名を成した人だ。続いて出て来た糾弾は、求めもしないキスをし

たとか、グループ写真で身体の一部を触ったというものだった。前者はフランケンが否定、後者は「選挙その他で記念写真は何千も撮る。そういう撮影で特に触ったことは覚えてない」と言ったが、記念写真に並んだ時に手が横の人の背中や尻に触れるのは、男女問わず、自然にありうる。それを故意にしたと言うのだ。

ジャネットは、ミネソタに戻ってから email で次のように加えてくれた。

「今、似たケースがある。ミネソタ州の下院議員で目下州司法長官に立候補している Keith Ellison が元ガールフレンドから domestic abuse で訴えられている。しかし、これはベッドで寝ている時に足を引っ張られた、靴を取られた、仲違いの後で自分が(エリソンの)家を出ようとしなかった時に雑言を吐いたというもの。私はこんな場合被害者の言い分を信じがちだが、この女性の場合は火のないところに煙があると言いたてていると思う。これはフランケンに対する糾弾も同じだと思う」。

キース・エリソンは、2006年下院議員に選出された最初のムスリム教徒で、進歩派、2017年民主党全国委員会の次席になった。

## 占領中の検閲と接吻

キスや体に触るといえば日本占領や1950年代のことを思い出す。

ぼくの一家は台湾から引き上げて、まず父の故郷の福岡は筑後川の傍らの片田舎、次に両親が職を見つけた長崎の小島・飛島で過ごした。また、占領は小学生4年生までだった。ただ、ずっと後にぼくは猪瀬直樹氏に誘発されて Persona: A Biography of Yukio Mishima を書いたこともあり、占領中の政策その他の出来事を多少は読み知っている。

接吻は三島由紀夫の短編「サーカス」に一度だけ出てくる。しかし、アメリカの検閲を恐れて採らなかった、と書いたのは野田宇太郎で、『灰の季節』だった。ところが、そんな日本編集者の検閲の懸念とは裏腹に、占領本部の民間情報教育部映画劇場課長の David Conde は「民主主義のため」日本の映画ではキスをどんどんやるべきだと発言した。これはコンデの略歴にも記してある。このお達しには当時の日本の女優男優が慌てたらしい。

1950年代には思春期のぼくらはハリウッド映画をかなり見た。その目的が接吻を見るためだったかどうかは覚えていないが、美男美女の高い鼻が邪魔にならないのかなあと不審がったものだ。また、アメリカ人の大げさな表現、身振りの中でも抱擁には接吻と同じく強い印象を受けた。

アメリカではそうした接吻や抱擁は今でもあまり変わっていない。人生の3分の2をここで過ごしたぼくは今でも公衆の面前での長い接吻や抱擁にはたじたとする。

セクハラ問題が法制的に整ったのは1990年代の後半だった。それでも当初はまだ、男が失礼なことをすれば一つ平手打ちを食わせれば済むのだと言う小粋な女性もいた。そんな場面は昔のハリウッド映画ではよくあったと思う。

更にセクハラ騒ぎが進むと、職場の男が萎縮する。これじゃ面白くない、と女性の中にはワザとセクシーな化粧や服装で会社に行き、挑発的なポーズをとって男性職員の机に腰掛けたりする人たちが出てきた——と報じたのは Wall Street Journal だった。あれももう十数年間の前だろうか。その類の洒落た記事や報道に接しなくなって久しい。

## #MeToo 未亡人

こう言うと、現下のトランプ政権の下では頑固

な反動主義者と見なされるかもしれない。トランプは、Esquire 誌の Charles P. Pierce が名指しで呼ぶのを拒絶、単に president\* として示す「悪辣な道化師 vicious buffoon」であり、「アメリカ現状の最悪の要素全てを入れた器」だが、この道化師は、最高裁判事指名 Brett Kavanaugh の公聴会で、カバノーから強姦されそうになった体験を述べた心理学者 Christine Blasey Ford を、こともあろうにその直後の政治集会で猿真似をして嘲笑した、救い難い男である。

しかし、セクハラや #MeToo による糾弾とそれによる裁断には釈然としないものが残る。今や社会は「少年愛者は終身刑に処すべし」「セクハラをした男は全て社会ののけ者にしろ」と要求するが、その他もっと重要なことはあるのではないかと書いたのはイギリスの軍事歴史家 Max Hastings である（“Smoke and the Mirrors,” The New York Review of Books, Sept. 27, 2018）。少年愛者云々がカトリック教会の聖職者に関わるセックス騒ぎであることは言うまでもない。

そうした中で、今年7月にはスウェーデンのソプラノ Anne Sofie von Otter は夫の Benny Fredriksson が3月 #MeToo 糾弾の結果自殺したと公表した。そのためフォン・オッテルは「世界で最も著名な #MeToo 未亡人」になったと報じられたが、このストックホルム劇場監督フレドリクソンの場合、監督のやり方に対する苦情が根も葉も無い糾弾に広がったようだ。

フォン・オッテルは、「#MeToo は群集心理を煽る」「人間には良い点もあれば悪い点もあるが、私たちは最早中世時代に生きている訳ではない。おおよけに人を晒し台にかけたり、唾棄したりしない」と言った。その通りだと思う。

さとう ひろあき 翻訳家・コラムニスト在NY